

# 森田慶一と1931年パリ植民地博覧会

## —書かれなかった台湾建築調査報告—

足 立 崇<sup>†</sup>

Keiichi Morita and the 1931 Colonial Exposition, Paris:

Unwritten Report on Taiwan Architecture Survey

ADACHI Takashi<sup>†</sup>

### 要 旨

本稿は、日本における建築論の礎を築いた森田慶一（1895-1983）に着目し、森田と台湾とのかかわりにおける知られざる一面を明らかにするものである。森田は1931年パリ植民地博覧会で開催される植民地都市計画会議のための報告書作成を依頼された。それは朝鮮と台湾における「住宅」と「美学」に関する報告書作成依頼であった。森田はその依頼を断ったが、1939年の台湾訪問の際の講演で、その依頼に応えるような内容を語っていたことが明らかとなった。また、1931年の会議報告書依頼は、森田の南洋での建築調査の動機の一つとも言え、台湾での講演はその後の森田の南方研究の方向性を示していたことが明らかとなった。

### Abstract

This paper focuses on Keiichi Morita (1895-1983), who laid the foundation for the theory of architecture in Japan, and clarifies unknown aspects of Morita's relationship with Taiwan. Morita was asked to prepare a report for the Colonial Urban Planning Conference to be held at the Paris Colonial Exposition in 1931. It was a request to prepare a report on "habitation" and "aesthetics" in Korea and Taiwan. Morita declined the request, but the content of his lecture on the occasion of his visit to Taiwan in 1939 was an overview in response to the request. It was also revealed that the request for a report on the 1931 conference was one of the motivations for Morita's research on architecture in the South Seas, and that the lecture in Taiwan indicated the direction of Morita's subsequent research on the South Seas.

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学 デザイン工学部建築・環境デザイン学科准教授

草 稿 提 出 日 11月11日

最終原稿提出日 3月3日

キーワード：森田慶一，台湾，パリ植民地博覧会，住宅，美学，南進

**Keywords** : Keiichi Morita, Taiwan, Colonial Exposition, Paris, Habitation, Aesthetics, Southward Advance

## 1. 序

1920年，東京帝国大学建築学科在学中の学生6人が，分離派建築会を結成し，それまでのように西洋建築の様式を重視するのではなく，技術的な構造を重視するのでもなく，新たな芸術表現こそ重要とし，真に意義ある新建築を目指すことを宣言した。6人の名は石本喜久治，堀口捨巳，山田守，森田慶一，瀧澤真弓，矢田茂である<sup>1</sup>。以後，分離派建築会は7回にわたり展覧会を開催し，この動きは日本における近代建築運動の最初期のものと位置づけられ，近年再評価されている<sup>2</sup>。京都帝国大学建築学科を創設し「関西建築会の父」とも言われた武田五一は，1922年に分離派建築会メンバーの一人であった森田慶一（1895-1983）を京都帝国大学建築学科助教授として招聘する。以後森田慶一は建築設計のかたわら古代ローマの建築家ウィトルウィウスの建築論を探究し，京都大学を中心に多くの建築論研究者を育て，日本における建築論研究の礎を築いた。森田はこうした功績が認められ，1974年には建築学会大賞を受賞している。

これまで森田慶一に関する研究は，ウィトルウィウスの建築論研究の視点から語られることが多かった。しかし，近年，大宮萌恵による森田の1938年南洋群島建築調査に関する

---

1 本論で対象とする森田慶一以外の5人の略歴を以下に記しておく。

石本喜久治（1884-1963）は，日本の近代建築家の一人で，竹中工務店に勤務した後，1927年に片岡安とともに大阪に片岡石本建築事務所を開設。1931年には石本建築事務所を開設した。堀口捨巳（1895-1984）は，日本近代を代表する建築家の一人で，建築史家，造園家，庭園史家，茶の湯研究，歌人でもある。数寄屋など和風建築の美学を近代建築にとりいれた作風で知られる。1949年には明治大学建築学科創設の中心となり，日本芸術院賞（1957），紫綬褒章（1963），日本建築学会大賞（1969）など数々の賞を受賞している。

山田守（1884-1966）は，日本の近代建築家の一人で，逓信省に長く勤め，独特の曲線や曲面を用いたデザインの作品を残した。1949年には山田守建築事務所を設立し，東海大学の設立にもかかわり，教鞭をとった。日本武道館（1964）や京都タワー（1964）の設計者としても知られる。

瀧澤真弓（1896-1983）は，日本農民美術研究所（1922）などを設計し，大阪市立大学などで教鞭をとった。

矢田茂（1896-1958）は，大学卒業後，清水組に勤務し，清水ビルディング（1930），旧高岡電燈本社（1934），第一ホテル（1938）など数々の作品を生み出した。

2 田路貴浩編，『分離派建築会 日本のモダニズム誕生』，京都大学学術出版会，2020

研究<sup>3</sup>など、これまで焦点の当てられなかったことについての研究も出はじめている。本稿もこれまであまり焦点の当てられなかった森田と台湾とのかかわりについて、今回新たに発見された1931年パリ植民地博覧会における植民地都市計画会議のための報告書依頼を示す資料をとおして考察したい。

## 2. 1931年のパリ植民地博覧会と森田への依頼

1931年5月6日から11月15日にかけて、パリ植民地博覧会が開催された<sup>4</sup>。パリ植民地博覧会では植民地及び熱帯諸国における植民地都市計画会議が同年10月に開催されることになっていた。これに関連して、1931年7月フランスの植民地都市計画会議事務局長から在仏日本国大使宛てに1通の文書が届く<sup>5</sup>。そこには、10月に植民地及び熱帯諸国における植民地都市計画会議を開催するので、朝鮮および台湾における都市計画事業に関し、報告書をまとめ報告してほしいこと、加えて衛生問題や法律に関する補足報告書もいくつかほしいことが記されていた。さらに、京都帝国大学建築学科の森田慶一を指名し、森田に「住宅」や「美学」に関する報告を依頼した旨が記されていた。これを受け、在仏特命全権大使芳澤謙二吉から外務大臣幣原喜重郎に宛てた文書が下記のものである。

公第四一二号

昭和六年七月十三日

在仏

特命全権大使 芳澤謙吉

外務大臣男爵 幣原喜重郎 殿

- 
- 3 大宮萌恵,「森田慶一による1938年夏の南洋群島視察滞在について」,『日本建築学会大会学術講演梗概集』,建築学会,2023-09,pp.439-440  
大宮萌恵,「空白となった超越的なもの:森田慶一による1938年夏の南洋群島調査滞」,『日本建築学会計画系論文集』,第89巻第817号,建築学会,2024-03,pp.568-577
- 4 パリ植民地博覧会については、下記文献に詳しい。  
パトリシア・モルトン,『パリ植民地博覧会 オリエンタリズムの欲望と表象』,ブリュッケ,2002  
Patricia A. Morton, *HYBRID MODERNITIES Architecture and Representation at the 1931 Colonial Exposition, Paris*, The MIT Press, 2000
- 5 「各国ニ於ケル学会関係雑件 2. 植民地都市計画学会」, JACAR (アジア歴史資料センター), Ref.B04011350600, 各国ニ於ケル学会関係雑件 (I-1-3-0-1) (外務省外交史料館)

植民地都市計画学会ニ関スル件

目下当地ニ開催中ノ植民地博覧会ニ於テ来ル十月植民地及熱帯諸国ニ於ケル都市計画ニ関スル国際学会ヲ開催スル趣ヲ以テ同学会委員会ヨリ同学会日程ヲ送付越シ且本邦主要都市計画並ニ朝鮮台湾ニ於ケル此種事業ニ付報告ノ提出ヲ得ハ幸甚ナル趣別添写ノ通書書翰ヲ以テ申越シタルニ付テハ関係方面ニ於テ何等回答若ハ報告送付ノ希望アルニ於テハ右ノ趣伝達方可然御取計相成様御配慮相煩度

追テ別添写来翰ニ依レハ同委員会ハ直接京都帝大森田建築学教授ニ住宅及建築美学ニ関スル報告ヲ依頼セル趣ナリ

右為念申添フ<sup>6</sup>

同会議からの依頼について上のように記され、関係方面に回答もしくは報告してほしいこと、また、同会議より直接に京都帝国大学の森田に「住宅」および「美学」に関する報告を依頼していることが記されている。フランスの植民地都市計画会議事務局長の名前はフランス語文書のなかでJean BOYERあるいはJena BOYERと記されているが、いずれの名前でも情報は得られなかった。植民地都市計画会議の報告文書<sup>7</sup>を示すデータにはJean BOYERやJena BOYERではなく、Jean ROYERという名前が記されているので、おそらくフランス語文書のJean BOYERやJena BOYERはJean ROYERのタイプミスではなかろうか。Jean ROYER（ジャン・ロワイエ）は1903年生まれの都市計画家であり、1932年に雑誌*Urbanisme*の創刊もした人物のようであるが、なぜ日本の報告者として森田だけを指名し報告依頼したのであろうか。ジャン・ロワイエは文書の中で森田を「自分の友人である京都帝国大学建築学科教授である森田慶一氏」<sup>8</sup>と記しており、森田とすでに交流のあったことがうかがえる。しかし、ジャン・ロワイエと森田との関係がどのようなものであったかは不明である。森田は1932年から1934年にかけてヨーロッパ留学しており、その準備の関係でジャン・ロワイエと知り合っていたのであろうか。ちなみに、1931年といえば、森田を京都帝国大学に招聘した武田五一が5月末日に神戸を出帆し、10月31日に帰国するまで、欧米を視察した年でもある<sup>9</sup>。また、武田は同年1月に台湾を旅行し、台湾の建築や都市を見ている。森田に報告書を依頼することに武田が関係していた可能性も考えられ

6 同上

7 Jean ROYER, *L'urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux*, Communications du congrès international de l'urbanisme aux colonies, 2 tomes, La Charité-sur-Loire: Editions de l'urbanisme, 1932-1935

8 同上5 なお、実際にはこのとき森田は助教授である。

9 武田五一、「歐洲を巡りて」、『建築雑誌』, 558, 建築学会, 1932-06, pp.759-768

るが、不明である。いずれにせよ、ジャン・ロワイエは、「森田慶一氏ならできると思います。そうすれば、私たちは日本に関して非常に素晴らしい一連の報告書を手に入れることができるでしょう」<sup>10</sup>と記しており、森田に絶大な信頼を寄せていたことがうかがえる。

しかし、森田はこうした熱烈な依頼に対し、結局断りの返答をしている。その理由について、京都帝国大学からの返信文書には次のように記されている。

庶第一二七号

昭和六年九月十五日

京都帝国大学総長 新城 新蔵

文部省専門学務局長 赤間 信義 殿

巴里植民地博覧会ニ於ケル植民地都市計画学会ニ関スル件  
標記ノ件ニ関シ去ル八日付官専四四四号御照会ノ趣了承、森田助教授ニ就キ問ヒ合セ候  
處左記理由ニ依リ乍遺憾先方ノ希望ニ添ヒ難キ旨申出候間右不悪御諒知相成度此段及回  
答候也

記

- 一、植民地特ニ台湾ノ建築ニ就テ今日迄研究シタルコトナキコト
- 二、実地見学ニ旅行スル機会ナキコト
- 三、報告ニ関ニ合フ程度ノ研究又ハ調査スルニシテモ時日不足ナルコト（森田助教授宛私信ニ依レハ八月中ニ先方へ到着スル様トアリ）

以上<sup>11</sup>

この文書から森田には事前に私信が送られ、8月中に報告書を提出するよう依頼があったようである。この私信がいつ森田のもとに届いたのか不明だが、朝鮮や台湾の建築を実地見学したことがなく、それまで研究したこともなかった森田にとって、締め切り期限の短い依頼を断らざるを得なかったことは当然であろう。この頃森田はウィトルウィウス研究を推し進め、博士論文をまとめようとしていた時期であり、翌年にひかえたヨーロッパ留学の準備などもあり、なおさらそうした時間は取れなかったであろう。

文部省は学術研究会議にも報告者の手配を要請していたが、これも学術研究会議長桜井

10 同上5

11 同上

錠二より文部省専門学務局長赤間信義宛ての9月15日付文書で、時日切迫のため手配できないと断られている。そのため、日本側からは植民地都市計画会議への報告書は送られなかったようである。

### 3. 森田慶一と台湾建築とのかかわり

植民地都市計画会議の依頼から8年後の1939年夏、森田は台湾を初めて訪れ建築見学している。7月末から8月初旬まで滞在し、8月11日に台北の鉄道ホテルで台湾建築学会主宰の講演を行っている<sup>12</sup>。「建築小観」と題された講演の冒頭、森田は次のように語っている。

私は此の夏休を利用致しまして予々興味を持って居りました沖縄の建築を見学に参ったのでございますけれども、地図を見ますと台湾は沖縄の直ぐ傍なので、此の機会にと思って先月の終りに此方へ上った様な次第でございます。<sup>13</sup>

これは調査研究目的ではなく、あくまで個人的な旅行であったが、それでも総督府の職員や建築関係の人々の案内によって森田にとっては台湾建築の「全部と言って宜い程」<sup>14</sup>を見学させてもらったという。この講演のなかで、森田は主に二つの問題を論じている。一つ目が「表現の主体としての建築の問題」とくに「モニュメンタルな表現の問題」であり、二つ目が「適応性の問題」である、そして最後にこれは別な話として「琉球の建築について」語っている。一つ目の「モニュメンタルな表現の問題」に関連して森田は次のように語っている。

特に事変以来或は事変前から何か日本的なものを象徴しやうと云ふ考へ方、さう云ふものは必ずしもモニュメンタルなものとは限りませんが、然しさう云ふ日本的なものを象徴しやうと云ふ考へ方は、最も表立つては矢張りモニュメンタルな表現を通じて現れて来て居る<sup>15</sup>

---

12 森田慶一、「建築小観」、『台湾建築会誌』、11-4号、1939年12月、pp.269-280

13 同上、p269

14 同上

15 同上、p271



モニュメンタルな表現に於てどう云ふ様式を採れば一番宜いかと云ふことが具体的な問題として提出されている訳であります。日本で言えば所謂日本式の建築と云ふものをどう云ふ様にすれば宜いかと云ふことがそれであります。<sup>16</sup>

モニュメンタルな表現をどのようにすべきかという問題は、当時日本の「内地」だけでなく、台湾において建築する際も問題になったことであろう。それゆえこの講演で一つ目の問題として論じられたのである。台湾の建築として時勢的にどういう表現をそれに与えるべきかというのは、ある意味日本の「内地」より複雑な問題ともいえる。この問題に対して森田はどのような表現をすべきという具体的な議論ではなく、むしろモニュメンタルな表現をなしうる建築家の養成が必要として次のように語っている。

建築家の養成、表現能力を充分に持った建築家の養成と云ふ様なことは決して一朝一夕で出来ることでありませんで、矢張り此の事変が終わりまして日本の国家的の力が非常に伸びます時に、それは何年後になるか存じませんが、さう云ふ様な時代が来た時に直ぐさう云ふ人を出すと云ふ譯には行かないのでありまして、さう云ふのに必要な人は是非今から養成して置くことが必要であると考えます。<sup>17</sup>

次に、台湾の建築はどうあるべきかという問題について、森田以前に台湾を訪れた建築歴史・意匠の研究者たちはどのように語ったのか見ておきたい。

森田を京都帝国大学に招聘した武田五一は先述のように1931年1月に台湾を訪れている。このとき武田も総督府の職員の歓待を受け、台湾建築を見て回り、旅の終わりに「蓬萊島所感」<sup>18</sup>と題する講演を行っている。武田はそこで、当時日本で流行していた「インターナショナルスタイル」などの考えを浮薄とし、希望するのは「ほんとうの機能主義、構造主義の建物」であり、「もっと日本民族の真底から湧いて出て来た形が現れ」たような「日本の新様式」であるとしている。そして、そうした「日本の新様式」を生み出す地として台湾に期待を寄せ、将来の台湾建築の新しい様式は、とにかく「台湾独特」のものであるべきとし、もともとそこに住んでいた原住民族の建築や漢族の建築など、土着性を有した建築について根本的に研究し、なぜそうした形が生まれてきたかを考え、再三の熟慮の結果生まれると主張している。

---

16 同上, p272

17 同上, pp.273-274

18 武田五一, 「蓬萊島所感」, 『台湾建築会誌』, 3-2号, 1931, pp.1-10

建築史研究の大家、伊東忠太も1936年の台湾での講演<sup>19</sup>で、将来台湾に建てられるべき建築について触れている。伊東は「台湾に建てられるべき建築は台湾の土地に相応すれば宜しい。結局此一言に尽きるのだろうと思ふのであります。総ての問題はそれから割出して行って自然に解決して行くのだろうと思ひます」<sup>20</sup>と述べている。そして、台湾に長く居て研究した人が、「有合せの日本建築」でなく、「有合せの欧米建築」でもなく、「有合せの支那建築」でもない、台湾に適するような「新建築」を独創しなければならず、その際、台湾固有の廟祠などは、大いに参考になると説いている。

東京帝国大学教授で建築史研究者の藤島亥治郎もまた、1936年に訪台したときの講演で台湾の「新建築」について語っている<sup>21</sup>。藤島は当時日本における建築が、「日本主義」あるいは「日本精神」などを前面に出した「国粹的建築」にかたよりつつあることを指摘し、そこでは形式が重んじられすぎているとしている。藤島の言によれば「形式から言い過ぎて居る為にどうしても日本風の建築は屋根をつけなければならぬと云ふ様な妙な意見が出て来る……（中略）……屋根と云うものは必要に応じてつけたものでありますから、必要がなければなくても宜しい、なくなったと云っても日本の建築ではないと云ふことは言えない……（中略）……形式を余り一律に決定し過ぎると云ふと二進も三進も行かない一つの枯渇した意匠的情操に片寄って下う」<sup>22</sup>という。そして台湾建築の形式を表面から見るのでなく、その由ってくるところの原因や内容を汲み取るべきであり、そのために台湾建築史研究が必要と述べている。

森田は台湾の建築関係者を前に、武田や伊東、藤島のように台湾建築はこうあるべきと主張するわけではなく、これまであまりなされてこなかったモニュメンタルな表現をなしうる建築家の養成こそ重要と語り、教育的側面の重要性を語ったのである。

森田講演の二つ目の「適応性の問題」については、人間の適応性すなわち環境の自然的な条件に適応する能力というものが、建築設計にどういう意味をもっているかという問題として語られる。日本国内の問題としては、アメリカで発達した空調設備のように人工的に建築の快楽主義を無反省に追求することの問題について語り、「自然な住い方」、「もっと自然を保存するような建築のやり方」の方がよくはないかという反省の必要性について述べている。さらに、台湾は日本と気候が異なり1年中温暖であるため、相対的に変化の大きい気候に適応してきた日本人が台湾に移り住んだ場合、もともと持っていた適応性が

19 伊東忠太、「工学博士伊東忠太先生講演」、『台湾建築会誌』、8-5号、1936、pp.287-298

20 同上、p289

21 藤島亥治郎、「台湾建築談議」、『台湾建築会誌』、9-3号、1937、pp.169-184

22 同上、p174



減退するのではないかと述べている。つまり、台湾においては日本人がもともと持っているかなり弾力のある適応性を失わないことの要求が建築の上にも現れてくるだろうという。しかし、ここでも森田はそれだから台湾の建築はこうあるべきというものを提示することはなく、あくまで問題点を示すにとどめ、その先は現地の人々の手に委ねている。

ここで1931年パリ植民地博覧会の植民地都市計画会議から森田に依頼のあった、台湾の「住宅」および「美学」に関する報告とはどのようなものを想定していたかを見ておきたい。ジャン・ロワイエから在仏日本国大使に宛てた文書には会議の包括的な議題項目が記されており、そこには「植民地時代の住宅」という項目と「美学」という項目が含まれている。さらに、「植民地時代の住宅」という項目には「ヨーロッパ人のための住宅」、「ネイティブハウジング」、「建設時の換気」、「冷房設備」、「植民地の観光と素晴らしいホテル」といった論点があげられており、「美学」という項目には「現存する記念物の保存と絵のように美しい先住民の古い都市の保全のために取られるべき措置」、「地元の建築物への敬意」、「建築物の建設にはどの程度先住民の芸術を使用しなければならないのか」、「近代建築における地元の職人の使用」といった論点があげられている<sup>23</sup>。森田への私信の文面は明らかでないが、森田の報告に求められた「美学」と「住宅」の問題もこうした議題項目の内容に沿ったものとなるよう記されていたであろう。森田は台湾での講演内容について「内地」のことを事々しく述べるのではなく、「私の建築に就て考へて居りますことを少し述べさして頂きたい」<sup>24</sup>、「近頃の建築界にはいろいろな方面で問題があると思いますが其の中の私の気付きました点を二つ三つ取上げてお話を申し上げたい」<sup>25</sup>と冒頭述べている。「モニュメンタルな表現の問題」については、雑誌*Das Werk*掲載のピーター・マイヤーとハンス・シュミットの関連記事を抄訳編集したものが、森田によって「建築に於ける記念性の問題」<sup>26</sup>と題して1938年に資料紹介されるなど、森田も述べているように当時よく考えていた問題であったのであろう。しかし、このとき、1931年に植民地都市計画会議から台湾建築に関する報告依頼のあったことも思い出されていたのではないだろうか。なぜなら台湾での講

23 同上5

24 同上12, p269

25 同上, p270

26 森田慶一、「建築に於ける記念性の問題」、『建築学研究』, 89, 1938, pp.49-54  
冒頭、以下のように記されている。

「これは雑誌*Das Werk*本年一月号所載のMusée de l'Art modern, Paris 1937. Peter Meyer及び同誌四月号所載のAnmerkungen zum Musée de l'Art modern, Hans Schmidt Ueberlegungen zum Problem der Monumentalität, Peter Meyerを抄訳編集したものである。勿論記念性の問題に対して十分な解答を与えているとは云えないが、種々の問題を含んでいるので最近、京都帝国大学建築学教室に於ける演習のテキストとして選んだもので、その際学生の高田・増田・師田三君がこれを抄訳したので、私がこれに筆を加へて、ここに広く紹介する次第である。」

演で語られた「モニュメンタルな表現の問題」と「適応性の問題」は、植民地都市計画会議から依頼された「美学」と「植民地時代の住宅」の諸論点とそれぞれかかわっているからである。植民地都市計画会議からの依頼に対し、森田が8年の歳月を経て、概論的にはあるが応えているのである。

なお、「モニュメンタルな表現の問題」と「適応性の問題」とは、1978年に出版された森田の主著『建築論』<sup>27</sup>の中でも重要な問題として扱われている。まず森田は自身の建築論は「建築というものをできるだけ全一的に捉えて、その本質を明らかにしようとする理論的な体系的な考察」<sup>28</sup>と定義している。その上で、その建築論は「制作において建築家に反省の道筋を示すことができるということであって、制作が建築論によって直接に規制されたり指導されたりするということではない」<sup>29</sup>としている。そして、「モニュメンタルな表現の問題」は、「建築造形における表現の諸相」の中の「記念的な表現の問題」として扱われており、記念的な表現の相が「国家意識の昂揚されるところに顕著に要求される」<sup>30</sup>としたところの注には「たとえば、第一次と第二次の世界大戦の中間期に、ファッショ的色彩の国にしる共産主義を標榜する国にしる、例外なく国家的パトスは建築に記念性を要求した。日本もその例外ではなかった」<sup>31</sup>と当時を振り返り記している。また、「適応性の問題」は、「効用性の問題」の中の「必然的な用の問題」と「快適さの問題」としてそれぞれ扱われており、その中で「人間集団の運命は、生物学的に立証することは困難であって、どうしても歴史学・社会学の方法に拠らざるをえない」<sup>32</sup>としたところの注には「民族における環境適応能力の生物学的遺伝の問題はしばらくおいて」<sup>33</sup>と記している。

#### 4. 南進との関係から

この講演で、森田は話をさらに進めて次のように語っている。

もっと日本人が南に伸びた場合に台湾よりはもう一つ気候的变化の少い南に於て日本人が殖えて行く、其の土地の気候条件にしか適応しないような日本人が殖えて行くと云

27 森田慶一、『建築論』、東海大学出版会、1978

28 同上、p3

29 同上、p5

30 同上、p140

31 同上、p328

32 同上、pp.28-29

33 同上、p324

ふことが果たして適当かどうか、さう云ふ植民政策的な問題に迄発展して行く。之は唯建築だけでは解決の出来ない問題だと思ひますが、然し若しさう云ふ根本的な問題が解決された場合に建築家がそれに適する様な建築をどう云ふ様に造ったらよいかと云ふことは、内地とは大分違った形で現はれて来るだろうと思ひます。<sup>34</sup>

南進論が展開される時勢の中、台湾よりも南に移住した日本人たちの建築はどうあるべきかという問題に言及しているのである。大宮萌恵によれば、南洋に移住した日本人の住宅などに関する森田の研究<sup>35</sup>は1942年に東大・京大など複数大学で始められた「南方に於ける邦人住宅の研究」プロジェクトの一環であるという<sup>36</sup>。ただ、この頃南方研究は各方面で始められており、森田も各方面で講演を行ったようである。たとえば、南方建設の要請に伴い1942年京都帝国大学では全学を動員して南方研究に乗り出している。5、6月に文学部・農学部を中心に南方文化研究会、工学部を中心に南方工学研究会、医学部を中心に南方医学研究会、医・薬学科を中心に南方生薬研究会、理学部を中心に南方科学研究会が結成されている<sup>37</sup>。森田は5月9日に設立された南方工学研究会の第1回研究会において「南方建築の諸問題」と題する講演を行っている<sup>38</sup>。また、1942年10月26日から28日にかけて土木学会関西支部第13回土木工学研究会が開催され、毎日2時間の講演が一つずつ行われた。聴講者は「約600名で堂に満つるの盛況」であったという。一日目は「熱帯生活と邦人の心得」、二日目は「南方建築概説」、三日目は「国土計画と総合土木」というタイトルで講演が行われ、森田は二日目の「南方建築概説」という講演を行っている。報告記事にはその講演概要が次のように記されている。

南方建築の課題、南方的環境、敷地、間取、構成要素その他の問題として建築が効用

34 同上12, p278

35 森田慶一・横山尊雄・今中克三,「南方に於ける従来の日本人の住ひ方及び住宅の調査(第I報)」,『建築雑誌』,710,1944年1月,pp.21-33

森田慶一・横山尊雄・今中克三,「南方に於ける従来の日本人の住ひ方及び住宅の調査(第II報)」,『建築雑誌』,705,1944年6月,pp.209-216

36 同上3, 2024, p573

青井哲人,「大東亜の建築論(『建築雑誌』アーカイブス 第19回)」,『建築雑誌』,1507,2003年7月,pp.156-157

藤島玄治郎,「大東亜建築の構想(講演)」,『建築雑誌』,701,1943年8月,pp.543-546

37 「[京都帝大]南方研究会続々生まる」,『帝国大学年鑑』,昭和19年版,帝国大学新聞社,1943,p257

38 「南方工学研究会生まる」,『採鉱冶金』,20-6,1942年6月,p240

「京大に南方工学研究会」,『帝国大学年鑑』,昭和19年版,帝国大学新聞社,1943,pp.95-96

的な半面を持つ以外に芸術的な半面を持っていることはよく知られていることであるが、その効用的な芸術的な目的そのものも特に外地に於ては軍事的、政治的、経済的に各方面より検討されなければならぬとて種々参考事項を述べられた。<sup>39</sup>

1939年の台湾での講演は、日本人が南進した先での適応性と建築との問題を論じている点で、その後の森田の南方研究の方向性も示していたといえるのである。

ちなみに、森田は台湾での講演冒頭で「何と申しましても学校の研究室の中にばかり居りまして実際の建築と云ふものに殆ど触れないものでありますから」<sup>40</sup>と述べているが、実際は前年の1938年夏に南洋（マリアナ群島中のサイパン島、西カロリン群島中のヤップ島、パナオ島）での建築調査<sup>41</sup>を行っている。民族建築研究の第一人者である浅川滋男は、森田の研究について「ミューラーらの業績をふまえつつ、建築構造、建築過程に関する記録を残した森田慶一の論文〔森田 1939, 1941, 1958〕は、高い水準を示している」<sup>42</sup>と高く評価している。大宮萌恵は森田が南洋を訪問したことについて、師であり上司でもある武田五一が1932年に南洋群島へ旅行していたことを動機の可能性の一つとして検討した上で、むしろ1932年から1934年にかけての「在欧研究での体験と、そこから生まれた『広い限界で建築の本質を眺めたい』欲求が、ドイツ調査団による先行研究を参照しながらの南洋滞在に繋がる一つの動機だったと言えるだろう」<sup>43</sup>と述べている。たしかにそうした側面もあったであろうが、ここにもう一つ動機の可能性として、1931年の植民地及び熱帯諸国における植民地都市計画会議への報告依頼を加えることもできるのではないだろうか。森田が依頼された地域は朝鮮と台湾であったが、この会議は植民地だけでなく熱帯諸国にまで範囲を広げており、この依頼をきっかけに森田の中でそうした地域や問題への関心が芽生えたとも考えられるのである。また、この時期森田が沖縄と台湾を訪れたのも、そもそも前年に南洋を訪れ調査したことが関係していたのではないだろうか。南洋の建築に触発されて、同じ南方の沖縄、台湾の建築を見ておきたいと思ったと考えられるのである。

39 「土木学会関西支部第13回土木工学研究会開催」、『セメント界彙報』, 417, 1942年12月, p540

40 同上12, p269

41 森田慶一,「ヤップの家—南島建築記(1)」,『建築学研究』, 第92号, 建築学研究会編, 1939年, pp.21-33 (『森田慶一建築論集』, 彰国社, 1958, pp.437-468所収)

森田慶一,「内南洋の建築」,『建築と社会』, 24-8, 日本建築協会, 1941, pp.1-7 (『森田慶一建築論集』, 彰国社, 1958, pp.469-481所収)

42 浅川滋男,『住まいの民族建築学的考察—華南とその周辺—』, 京都大学博士論文, 私家本, 1992, p456

43 同上3, 2024, p570

## 5. 結

1931年植民地都市計画会議のための報告書作成を森田が依頼されたことをとおして、森田と台湾とのかかわりについて考察してきた。これまで森田が台湾とかかわったのは1939年の台湾旅行がはじめと考えられてきたが、1931年植民地都市計画会議のための報告書依頼がその端緒であった。その際に台湾に関する「住宅」と「美学」の報告書を依頼されたわけであるが、その依頼は森田によって断られた。しかし、1939年の台湾建築見学後の講演は概論的にその依頼に応えるような内容であった。また、1931年の会議報告書の依頼は1938年からはじめられた南洋での建築調査の動機の一つとも言え、台湾での講演はその後の森田の南方研究の方向性を示していたのである。

1939年の訪台以後、森田が台湾を再び訪れることはなく、台湾建築について語ることもなかった。そもそも台湾での講演でも台湾建築の「全部と言って宜い程」を見学した割には、個々の台湾建築について一切触れることがなかった。また、台湾建築はこのようであるべきと示すこともなかった。それは森田が台湾建築に興味がなかったということではなく、個々の台湾建築のあり様は現地の人々の手に委ねるべきというスタンスを崩さなかったということであろう。森田が言うように建築論は「制作において建築家に反省の道筋を示すことができるということであって、制作が建築論によって直接に規制されたり指導されたりするということではない」<sup>44</sup>からである。

## 謝辞

フランス語文書の読解については、エリック・ルフェーブル氏にご教示いただいた。記して謝意を表したい。

---

44 同上27, p5